『笈の小文』吉野巡礼の成立

―唱和する杜国―

濱森太郎

一　質疑

松尾芭蕉作『笈の小文』は、貞享四年（一六八七）十月の江戸出発に始まり、吉野・奈良・大阪・須磨明石を廻る近畿巡礼記である。江戸から名古屋までを【起】、伊賀・伊勢紀行を【承】、吉野・高野紀行を【転】、須磨明石紀行を【結】と区分すると、全体像を容易に概観することができる。この内『笈の小文』【起】の部で新規に挿入された「旅支度」は、巡礼者の盛大な江戸出立の送迎行事を描いて、巡礼記の体裁を整えたもの、【承】の部で挿入された「伊勢句稿」は、伊良子崎に流浪する杜国を迎え、「伊勢」から直に、吉野巡礼に旅立つという紀行文の【虚構】に従って挿入されたものである。[1]

しかし、この補筆・修正を宮本三郎氏の主張に照らすと、これらがいずれも表現の瑕疵と見なされ、[2]その多すぎる瑕疵のせいで作品全体の構図が見定めがたい。そこでその瑕疵を整理し、作品の後半に焦点を絞って箇条書きにすると、その一は、同紀行【転】の部「吉野巡礼」の「吉野三滝と備忘メモ」、その瑕疵の二は、同部の「高野・和歌浦句稿」、その瑕疵の三は、上記「句稿」に後続する「行脚論」の唐突さ、その瑕疵の四は、【結】の部「須磨明石紀行」の「夏の月二句」である。

これらを取り上げることで、いわゆる『笈の小文』の表現上の瑕疵を全体的に考察することができるが、それを一挙に仕上げることは筆者の力量に余る。そこで小論ではまず、「吉野巡礼」を対象とし、「吉野三滝と備忘メモ」を考察の中心に据え、「吉野三滝と備忘メモ」がいかなる表現努力の過程で挿入されたかを解き明かすことにしたい。

二　成立とテキスト

通説に言う『笈の小文』の成立は、この旅の同行者坪井杜国の訃報が幻住庵に伝えられた元禄三年四月八日（又は九日）に始まり、杜国の一周期が過ぎた元禄四年四月二一日、落柿舎滞在中の松尾芭蕉が書き差しの原稿（『笈の小文』）を清書するまでを

表1　芭蕉文献の元禄6・7年マーカー

テキスト	け	す	の	ほ	み
※泊船本	介21　遣5　計4	春24　須2 寸3	乃113　能9 農11	保10　本2	ミ11　美1
◎大礒本	介9　計1　希5 遣1　気12	春30　須11 寸5	乃197　能14	保5　本3	ミ17　美1
◎乙州本	介13　遣13 計4　気1	春6　須5 寸44	乃172　能47 農3　濃5	保6　本5	ミ13　美9 見5
中尾本	介11　計12 希6　気31　遣12	春77　須2 寸41	乃527　能66	保7　本25	ミ16　美51 見1
天理本	介11　計20 希8　気24	春8　須24 寸93	乃358　能54 農1	保7　本25	ミ19　美54
素龍本	介32　計19 希8　気2	春1　寸164	乃585　農1	保2　本40	ミ35　美35

泊船本=泊船本『野ざらし紀行』　大礒本=大礒本『笈の小文』　乙州本=乙州本『笈の小文』、中尾本＝中尾本『おくの細道』天理本=天理本『おくのほそ道』　素龍本＝素龍本『奥の細道』。数字は用例数を示す。用例数は、『笈の小文』本文部分のみの用例数。

言う。[3] ただし現存する『笈の小文』諸本は、いずれも元禄四年四月二一日、落柿舎において松尾芭蕉が清書した本文、またはその写しではない。

以前、自筆本が二本伝存する『野ざらし紀行』を使って作成した「元禄六・七年マーカ」を使うと、[4] それを容易に判別することができる。具体的には「け・す・の・ほ・み」の五文字、「介・遣・計」「春・須・寸」「乃・能・農」「保・本」「ミ・美」の十三字体がそのマーカーである（同じ仮名の先頭に基本字体、二位以下には補助字体を表示した）。

既に周知の様に、芭蕉が使う仮名字体には基本字体と補助字体とがあり、基本字体は満遍なく、また補助字体は行頭・行末の識別表示、同一文字の反復回避、該当単語のマークアップ、行文のショーアップなどに用いられる。上**表1**の「乃」のように常に使用頻度で一位を占めるのが基本字体、二位以下の「能・農」が補助字体に当たる。同一人物が使う仮名文字が変化しにくい理由は、この基本字体が常用されるせいだが、一方、補助字体は変動しやすく、上記「け・す・ほ・み」ではテキスト毎に複数字体が増減しながら併用されている。

大多数の仮名は、通常、基本字体一字、補助字体一～二字を一セットで使うが、中にはこの「け・す・ほ・み」のように、複数の基本字体、複数の補助字体が併用されるケースがあり、その様態変化が執筆年次を推定するマーカーとして役立つ。

この「け・す・の・ほ・み」の仮名が上表泊船本『野ざらし紀行』のような一セットで利用されるところが、元禄六・七年の松尾芭蕉の文字遣いの特色である。[5] そこでその「け・す・の・ほ・み」に焦点を絞って、大礒本・乙州本『笈の小文』のマーカーを上**表1**に表示した。大礒本の「け（気12）」、乙州本の「す（寸44）」を除けば、残りは元禄六・七年執筆の文字遣いに近い。また懸念される「け（気12）」「す（寸44）」は、中尾本・天理本『奥の細道』で使われる基本字体「け（気）」「す（寸）」と符合する。この中尾本・天理本『奥の細道』の底本となる芭蕉自筆テキス

トの執筆作業が元禄五〜六年と推定されるので、一年差と見れば支障のない用字差だと言うことが出来る。[6]

次に『笈の小文』冒頭で露沾公（岩城内藤藩、藩主息）に餞別句を賜り、「関送り」の儀式とともに江戸を旅立った風羅坊は、故郷で新年を迎え、一族再会を果たした後に、やはり旧主家の祝宴に送られて吉野を目指す。これに続く「芭蕉翁全傳」の記録は、次のようにある。

○よし野ニ立し朝、笠の書付

へよし野にて花を見せうぞ檜木笠

○同行二人乾坤無□[住]、風羅坊・萬菊丸トアリ。

萬菊も

へよし野にて我も見せうぞ檜木笠

（今栄蔵著『芭蕉伝記の諸問題』三八三頁、翻刻「芭蕉翁全傳」）

「萬菊も」と有るとおり嬉しげな二句連唱で、二人は伊賀上野を旅立っている。吉野巡礼の同伴者、坪井杜国は、唱和の才に恵まれた俳人だった。先ずは、桜で彩られる吉野巡礼に視線を移して、『笈の小文』の叙述の仕組みを観察すると、この二句連唱が吉野巡礼の「竜骨」をなすことが見える。

【1】「吉野入山」

弥生半過る程、そゞろにうき立（つ）心の花の、我を道引（く）枝折となりて、よしのゝ花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にてちぎり置し人の、い勢にて出むかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且は我為に童子となりて道の便りにもならんと、自万菊丸と名をいふ。（中略）

『笈の小文』吉野巡礼の成立

乾坤無住同行二人

①よし野にて桜見せふぞ檜の木笠　万菊丸

②よし野にて我も見せふぞ檜の木笠　万菊丸

旅の具多きは道さはりなりと、物皆払捨たれども、（中略）いとゞすねよはく力なき身の、跡ざまにひかふるやうにて、道猶すゝまず、たゞ物うき事のみ多し。

草臥て宿かる比や藤の花　初瀬

③春の夜や籠リ人ゆかし堂の隅

④足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶みたし花に明行神の顔

三輪　多武峰

臍峠　多武峰より龍門へ越道也

雲雀より空にやすらふ峠哉

（1）

【2】「吉野三滝」

瀧門

⑤龍門の花や上戸の土産にせん

⑥酒のみに語らんかゝる滝の花

西河

ほろ〳〵と山吹ちるか滝の音

蜻蛉が滝（※発句の欠落か―宮本氏）

布留の滝は、布留の宮より二十五丁山の奥也。

津国幾田の川上に有　大和
布引の滝　箕面の滝　勝尾寺へ越る道に有

（2）……

【3】「吉野桜巡礼」

桜

桜がりきどくや日々に五里六里
日は花に暮てさびしやあすならふ
扇にて酒くむかげやちる桜

苔清水

春雨のこしたにつたふ清水哉

よしのゝ花に三日とゞまりて、曙・黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、（中略）われいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたるいと口をし。おもひ立たる風流、いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。

（3）……

「高野和歌浦句稿」

高野

⑦ちゝはゝのしきりにこひし雉の声
⑧ちる花にたぶさはづかし奥の院　万菊

和哥

行春にわかの浦にて追付たり
きみ井寺（※発句の欠落か―宮本氏）

（4）……

【4】「吉野出山」

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ、馬をかる時は、いきまきし聖の事心にうかぶ。（中略）日比は古めかし、かたくなゝりと悪み捨たる程の人も、辺土の道づれにかたりあひ、はにふ・むぐらのうちにて見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中に金を得たる心地して、物にも書付、人にもかたらんとおもふぞ、又是旅のひとつなりかし。

衣更

⑨一つぬひで後に負ぬ衣がへ
⑩吉野出て布子売たし衣がへ　万菊（　）内は著者、以下同じ）

「吉野巡礼」の出発地が『笈の小文』では伊賀上野から伊勢に書き換えられている。加えて、その吉野巡礼の叙述には、はっきりした表現上の区画が設けられている。【1】「吉野入山」の冒頭に配置された「いでや門出のたはぶれ事せんと笠のうちに落書ス。」は、【4】「吉野出山」時の「吉野出て布子売たし衣がへ　万菊」と一対をなす。ここには、二人の花見遊山を仏道修行者による「入山・出山」として意味付けする意図がある。

しかもその首尾及び巡礼の要所には、この宗教儀式を言祝ぐように、風羅・萬菊による二句連唱が①～⑩まで十句配列されている。同じ時、同じ場所、同じ視線で、吉野巡礼の見所を語る二人連れを繰り返し描くところには意味が生じる。同行二人

の注意や感興を丁寧に揃えることで、二人が弾け、共鳴する次第を明瞭に語ることができる。この共鳴する心機は即興のライブに近く、勿論、二人連れで行う大方の巡礼旅に舞い降りる心機ではない。「同行二人」が共有するこの「感興の時」が連なることで、【転】の部に「竜骨」が形成されるのである。

ちなみに、「瀧門」における⑥酒のみに語らんかゝる滝の花」には「万菊」の署名がない。風羅坊が唱和する相手は例外なく万菊丸であり、⑤⑥の二句が唱和であることは疑いない。ではなぜここに万菊丸の署名がないのか。

その原因は、この署名の欠落がいわゆる『笈の小文』編集時に挿入された記事の特徴であることによる。杜国没後に書かれた二句連唱には杜国の署名が欠けている事が失念されているのである（詳しくは後述）。

次に、長い詞書と二句連唱で終始を区画する「吉野巡礼」の文脈中心部にも重要な意味がある。

■桜遊山の中心部

苔清水

春雨のこしたにつたふ清水哉

よしの丶花に三日とゞまりて、曙・黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて（中略）、われいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたるいと口をし。

当初、桜遊山を意図して始められた芭蕉・杜国の吉野巡礼では、「吉野巡礼」の動機を語ることは欠かせない。その叙述に当たって、いざ旅立ちの心踊りを「乾坤無住同行二人」で宗教的に意味付け、次に二句唱和を使って弾ける気分を語ることも可笑しくはない。「乾坤無住」は天地の間を大きく遊行する意志、「同行二人」は信頼し助け合う二人の求道者の意。特に「乾坤無住」には、求道者の弾んだ心意気が圧縮されている。

だがその心意気は、この度の桜巡礼の狙いではない。ここに言う「苔清水」は、回峰修行・滝修行を重ねて辿り着いた金峯山寺で「西行庵跡」の苔清水を賞味することを意味する。またその賞味の後には、吉野巡礼の実感を吐露する長い述懐が続いている。「金峯山寺奥の院」の外れに庵室を構えていた西行の山岳修行は、「心にせまり胸にみちて」くる新羅万象と無心に対峙する風流修行でもあった。西行法師は、大峰修行をもって吉野奥駆けの修験者として知られていた（金任仲「西行の大峰修行をめぐって―説話との関連を中心に―」『文学研究論集』第16号、'02／2）。風羅坊らの信仰の焦点は、宗教施設としてある吉野山「金峯山寺」ではない。「奥の院」にほど近い西行庵の「苔清水」や枝折りに向かい合うこと、そこから清明な詩心を受け取る行願結縁を意味する。勿論、この種の宿願が成就しないことも多い。「われいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたるいと口をし。おもひ立たる風流、いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり」。

一方、吉野巡礼の結末は、巡礼者風羅坊が辿り着いた長い「行脚論」で始まる。その後には、巡礼行路と修行経過とを一点に集約する「衣更」の詞書きがあり、その「衣更」に導かれて、

今現在の主従の感懐が簡潔に吐露される。

⑨一つぬひで後に負ぬ衣がへ

⑩吉野出て布子売たし衣がへ　万菊

「ゆへある人」風羅坊の衣更えは「一つぬひで後に」背負うことで果たせるが、万菊丸の「衣かへ」は、「布子（麻木綿の綿入れ）」を売ることで果たされる。この衣替えの衣並びに衣の扱の差異にも、二人の暮らしと心性の差異が現れている。[7] 万菊丸は貴僧に随身する従者の扱を受けているのである。

以上、整理すると【転】の章、「吉野巡礼」の初め・終りには、長い前書付きの二句連唱を配置し、文脈上の一区画を明示する意図がある。またその途中に配置した主従二人の二句連唱を竜骨とし、巡礼行路の要所々々で主従二人の共鳴する感興の到来を明示する構成が採用されている。

三　吉野「三滝」への疑義

こうした明示的な作意は、吉野行脚の二句連唱をジャムセッション（a jam session）に似た力動的な機知の波動として実現されるもので、黙読型の読書では看過されることが多い。この「吉野巡礼」に於いても宮本三郎氏のように、**【2】「吉野三滝」**には、いまだ叙述の不足があると言う指摘がある。すなわち竜門・西河・蜻蛉という三滝の叙述では、前二者には句を付すが、「蜻蛉」には句が欠けること。「しかもこれより一層不可解なのは、「蜻蛉が滝」に続けて、あたかも紀行本文のごとく（前掲本文点線（1）～点線（2））の布留の滝を説明し、さらに一段下げて布引・箕面の滝の名を記すことである。」（宮本三郎『蕉風俳諧論考』302頁）と言う。

実際、事実確認のために「惣七宛芭蕉書簡」（貞享五年四月二十五日付）に照らすと、関連箇所は「布留の社に詣（中略）、猶なつかしきまゝに弐拾五丁わけのぼる。滝の景色言葉なし。」とあるばかりで、美景の滝をいくつか並べて、滝尽し風に賞味する言葉はない。

宮本三郎氏が「見及んだ滝の名をここに一括して備忘のため書きとめたもの」（宮本三郎『蕉風俳諧論考』302頁）と見る理由は、『笈の小文』の礎稿となる前掲「惣七宛芭蕉書簡」に

滝の数　七ツ　〈竜門〉〈西河〉〈蜻蛉〉〈蟬〉〈布留〉〈布引〉箕面

と、七滝を集約した「備忘メモ」が残るからだろう。

しかし、これに反論する高橋庄次氏は「これは単に瀧尽しというよりは、むしろ順路を逐った道行的瀧尽しと言うべきであろう。」[8]と言う。高橋氏は、この「滝尽し」に先立つ吉野入山の叙述を「この条は、初瀬山・葛城山・三輪山・多武峰とつづく〝山尽し〟の形態をとっていることになる。つまりここは〝山尽し〟から「臍峠」を経て、〝瀧尽し〟へ転換する構成になっているわけである」[9]と言う。

しかし、吉野入山から吉野三滝に到る叙述を「山尽し」「滝尽し」だと指摘する高橋氏の主張には、もともと不可欠の「見な

し」が二つある。

初瀬

③春の夜や籠リ人ゆかし堂の隅

④足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶みたし花に明行神の顔

三輪　多武峰

臍峠（多武峰より龍門へ越道也）

雲雀（雀）より空にやすらふ峠哉

瀧門（マヽ）

⑤龍門の花や上戸の土産にせん

高橋氏の「見なし」は、「初瀬」は初瀬山、「三輪」は三輪山だと見なすことである。なるほど、これらの地名の後には、三つ続けて滝の名が続くので、それを「滝尽し」と見る視点に立つと、これらの地名は「山尽し」に見える。逆に言えば、もし後続する「滝尽し」が無ければ、これは初瀬寺、大神神社（おおみわじんじゃ）、談山神社（多武峰）参詣を済ませ、臍峠・龍門岳へと足を運ぶ吉野春峰の一コマとなる。

その上「惣七宛芭蕉書簡」には、先の「滝尽し」の後に、次の「峠・山峯」の記述がある。

①峠　六つ

琴引　臍峠（ホソ）

くらがり峠　当麻（ヒ）岩や峠　（野路）小仏峠

樫尾峠

②山峯　六つ

国見山　安禅嶽　高野山　てつかひが峯

勝尾寺ノ山　金龍寺ノ山

ここでは、高橋庄次氏がいう「初瀬」「三輪」「多武峰」が「峠」にも「山峯」にも数えられていない。

ちなみに、高橋氏が「順路を追った道行き的〈滝尽し〉」と言う場合も、滝の位置から見て、大和から摂津に続く行脚の行程が想定されるが、風羅坊らの実際の道程は、吉野から高野・和歌浦に向って続いている。

これを逆に言えば、もしここに「高野和歌浦句稿」が無ければ、[10]吉野巡礼の叙述は、「吉野入山」「吉野三滝」「吉野桜巡礼」「吉野出山」のシンプルな四段構成となり、吉野「入山・出山」が夾雑物無しに出揃うことになる。またもしここに「高野和歌浦句稿」が無ければ「吉野三滝」のメモ書きは、回峰修行、滝修行の足取りを示唆して、巡礼修行のはかどりを示し、吉野出山・奈良・大阪・須磨明石に至るこの物語の行路をシンプルに指示する役割を果たすことになる。

四　吉野三滝の挿入

ところで、通説に言う『笈の小文』の編成時、『笈の小文』は大きく姿を変えている。前稿に述べた通り、「伊勢句稿」が挿入されることで、二月の伊勢参宮に始まり、四月に、尼崎から須

磨・明石の古戦場を廻る約二ヶ月半の長旅が出現する。しかも、伊勢参宮が巡礼行事の始発点となる事で、風羅坊・万菊丸には修行者色が付与される。吉野遊山もまた、大峰修行に代表される山岳修行地として意味づけられる。吉野遊山もまた、大峰修行に代表される山岳修行地として意味づけられる。そこは『古今著聞集』巻二「西行法師大峰に入り難行苦行の事」にあるとおり、「飢寒辛苦」を通して我が身の「罪障消滅」を目指す修行者には欠かせない修行場となる。その西行にあやかるべく枝折りの跡を訪ねる風羅坊の巡礼もまた、[11]「回峰修行・滝修行」を伴う山岳修行として意味付けられる。

すでに前稿で見たように、現『笈の小文』【起】の部に「旅支度」、【承】の部に「伊勢句稿」が挿入された『笈の小文』編成時、編成作業には三点の共通項がある。一に、二人の旅路を廻国修行者の巡礼旅に化粧直しする、二に、紙片の挿入という略式の改編であり、三に、その結果、表現上に瑕疵を残す本文が出現すること、の三点である。

しかも宮本氏によると「吉野三滝」の質疑に関わって、それ以上に重要な事実は、実は「滝尽し」に関わる次のような『笈の小文』諸本共通の署名の欠失である。

瀧門（マヽ）

⑤龍門の花や上戸の土産にせん

⑥酒のみに語らんかゝる滝の花　（万菊か）

この前文に「臍峠」を注して「多武峰より龍門へ越道也」と有るとおり、「臍峠」は多武峰から龍門岳（標高九〇四㍍）を越える途中にある。龍門岳北西側の峠には、今も芭蕉の「雲雀より」の句碑がある。この「龍門」がもし「龍門滝」の略なら「多武峰より龍門へ下る道也」となる。⑤にいう「龍門の花」はこの龍門岳の桜で、その稜線を下ってゆくと、龍門寺跡と龍門の瀧とがある。⑥はその、本来修行場である「龍門滝」の桜の句である。つまりもともとここは、「多武峰・臍峠・龍門岳」と続く峠であり、高橋氏の主張のように「〝山尽し〟から「臍峠」を経て、〝瀧尽し〟へ転換する構成」では無かったのである。

ちなみに、一見、同工異曲とも言えるこの「龍門」の二句連唱は、龍門岳の見所二つを語って、あの時、あの場所、あの気分で、風羅・万菊が同じ感興に浸った事を示している。人品賤しからぬ風羅坊が言う「上戸（原義は、豊かに暮す家族）・土産（つと）（雅語）」、闊達な庶民である杜国の直截な物言いを示す「酒飲み・滝の花」。「酒のみに語らんかゝる滝の花」の「かゝる」は、「かゝる（このような）」と「懸かる（滝に懸かる花）」の掛詞だろう。先に記した長谷寺参篭時に、当初「木履はく僧も有けり雨の花」（『阿羅野』）とあった句形を「足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊」とより視覚的で直截な言葉遣いに改めたのは芭蕉である。[12]

さてこの「龍門」の二句が唱和であることは動かないが、この⑤⑥のような作者名を欠く唱和が、杜国没後、『笈の小文』の編集時に（元禄三年四月～元禄四年四月）に新規に挿入された箇所であることは何故か見落されてきた。その原因は後に尋ねるとして、今は、その作者名の欠失は何故出来たかを尋ねる必要があ

る。すると、実はこの連唱の記名欠失が、最終章、「須磨明石紀行」の叙述でも起きていることが分かるからである。

（1）須磨冒頭

①月はあれど留主のやう也須磨の夏

②月見ても物たらはずや須磨の夏　（万菊か）

（2）須磨明石句稿

③須磨のあまの矢先に鳴か郭公

④ほとゝぎす消行方や嶋一つ　（万菊か、（13））

この二句二連の通り、吉野三滝に於ける連唱の記名欠失は、単独の記名欠失ではない。吉野三滝から「須磨明石紀行」を貫くすべての連唱書式で共通する欠失である。またこの欠失は、大礒本・雲英本・乙州本と、『笈の小文』の主要写本で共通する欠失でもある。

この二句連唱書式が「吉野紀行」の「竜骨」であることはすでに述べた。その書記態度が『笈の小文』の「結」の章、「須磨明石紀行」まで延伸される事の意味は、第一に「吉野紀行」と「須磨明石紀行」とを同じ唱和のセッションで統合すること、またその二は、山岳巡礼（吉野）と海浜巡礼（須磨明石）とを一対の形で連結し、「山野海浜の美景に造化の功」（『笈の小文』）を探る『笈の小文』一巻の指針を出現させることである。さらに第三に同行二人の桜巡礼を文字どおり山野海浜をさすらう山伏修行に化粧直しする。加えて第四に随行者万菊丸を「唱和する人」として特徴づける。

ちなみに、先に「瀧門」の「⑥酒のみに語らんかゝる滝の花」を「万菊か」と単純に注記した理由は四つある。第一に、この叙述の骨格部には二句連唱をもって二人の「感興」を唱和する構図がある。第二に、この⑤⑥が臍峠・龍門岳・龍門滝を廻る回峰修行・滝修行という吉野巡礼行の眉目に位置して、二人の唱和が有るべき位置に相応しい。第三に、杜国の死後（元禄三年三月二〇日）に書かれた二句連唱には、共通して杜国の署名がない。第四に、①の芭蕉句は「花を見せうぞ」（『土芳筆芭蕉翁全傳』）、④の杜国句は「木履はく僧も有けり雨の花」（『曠野』）とあったものが『笈の小文』編集時に修正され、芭蕉の手が加わったと見なされることである。[14]

一般に、『笈の小文』の編成が始まったとされる万菊丸没後（元禄三年三月二〇日）なら、万菊丸の名が一時的に省筆されることはありうるが、署名の書き差しが自然になるのは、これらの句々の作者が万菊丸ではなく、作者芭蕉の代作である場合だろう。

五　海辺をさすらう巡礼

ところで、宮本三郎氏による『笈の小文』【結】の部（「須磨明石紀行」）の不審は、前掲（1）として表示した二句連唱に限られる。この同類二句のごとき配置を芭蕉が考える筈がないと同氏は不審する。

しかしその同類性には疑問符が付く。前者は「月は出ていても、夏では、主人の留守に訪ねて来たようだ」（『日本古典文學大系芭蕉句集』大谷篤蔵他校注）と落胆する風羅坊の句、後者は「なるほど、月を見てもご満足なされぬか、須磨の夏ではのう。」と前句に同感を表わす万菊丸の唱和の句である。一般にこの句は両句とも芭蕉作と見なされるため、「空の月を見ても、なんだか物足りないことであるよ。須磨の夏景色は」（『日本古典集成芭蕉文集』新潮社刊）と、前句と同じ落胆を繰り返す句と解され、同類二句かと不審されるのである。[15]

次にその二句連唱の共鳴作用を取り扱った「須磨明石紀行」の、①②、③④を唱和の句と認める高橋庄次氏は、①②句に謡曲『松風』を面影にした「歌謡調の韻律」（『芭蕉連作詩篇の研究』734頁）の繰り返しを、また③④の間には同曲中の海女、松風・村雨を面影にした「ほととぎす」の「尻取り句法」を読み取っている（『同研究』739頁）。筆者はこの解説の賛同者ではないが、ここに掛け合い唱和の作意があることは、次の発句「海士の顔」「似合しき」（杜国）に照らしても賛同されるだろう。[16]

○海士の顔先見らるゝやけしの花（『笈の小文』）　※男海士と芥子
○似合しきけしの一重や須磨の里　亡人杜国（『猿蓑』）　※女海女と芥子

この「芥子」の両句は「けしの花」を中に挟んで対照を成し、ユーモアを喚起する掛け合いで成立っているが、その掛け合いの呼吸の、緊迫と安堵とは、先の「郭公」の二句にも通じる。つまり「え！」と思う危ない「郭公」と「よし！」と安堵する機敏な「ほとゝぎす」とを対照し、ユーモアを交換する唱和の呼吸は、③④の句の応答にも具わっている。

ちなみに、これら唱和の句を含む須磨明石関係句は、いずれも『曠野』（元禄二年三月刊）には登場せず、『猿蓑』（元禄四年七月刊）に至って極一部が公表されている。この公表状況に照らして、『笈の小文』「須磨明石紀行」は、『笈の小文』編集期（元禄三年四月～元禄四年四月）の制作と見なされているのである。[17]

六　結び

結論を要約すると、次のようになる。新規に考察した【転】の部「吉野三滝」、【結】の部の「夏の月二句」、「ほとゝぎす二句」に共通するものは、【転】の部以後に顕在化する風羅坊・万菊丸の二句唱和である。この連唱書式が言わば「竜骨」として【転】【結】の部を繋ぎ、「同行二人」に舞い降りた「感興の時」を表示する。その「感興の時」の具体像を読むには、この作品の読み直しが欠かせない。

万菊丸の死後、『笈の小文』の編成にあたった松尾芭蕉は、【転】の部に「吉野三滝」を挿入して「回峰修行・滝修行」を演出し、【結】の部には「夏の月二句」「ほとゝぎす二句」を挿入して「須磨明石紀行」を『笈の小文』本文に組み込んだ。その組み込みを通じて「山岳巡礼」に「海浜巡礼」を追加し、「山野海浜の美景に造化の功を見」る『笈の小文』一巻の指針を出現させた。

その大きな修正の際に、紙片「吉野三滝と備忘メモ」の挿入が倉卒の間に行われたせいで、その句稿の端々には説明の不足が生じている。

この「吉野三滝と備忘メモ」がここに挿入される『笈の小文』編集時、『笈の小文』の物語の時空は、大和から摂津・兵庫・須磨・明石に向って延伸される。巡礼者らしい行状に、修行者風の人物造形が加わり、「山野海浜」を経巡る巡礼記『笈の小文』の竜骨が誕生する。丁度その時なら、「高野・和歌浦句稿」はいまだ染筆されず、かつその予定も無かったとして不思議ではない。「同句稿」は「吉野三滝と備忘メモ」に十五行ほど遅れて書かれる位置にあるからである。

それでは、大和から摂津に向う「道行き的滝尽くし」が無効になるにも関わらず、「高野・和歌浦句稿」は、いつ、なぜこの位置に追加されるのか。

【注】

(1) 拙稿「『笈の小文』の表現の瑕疵について」(『國文學攷』二一七号、平成二十五年三月三十一日)に述べた。

(2) 宮本三郎著「『笈の小文』への疑問」『文学』昭和四五年四月号・五月号。同著『蕉風俳諧論考』笠間書院刊、昭和四九年八月に再録。

(3) この点は、尾形仂著「鎮魂の旅情」(『国語と国文学』昭和五一年一月号。『日本文学研究資料叢書　芭蕉Ⅱ』再録。)にすでに整理されている。

(4) 拙著『松尾芭蕉作『野ざらし紀行』の成立』第三章の四「続、泊船本の用字特性―晩年執筆の痕跡」P.三五八参照。

(5) (1) 拙稿に同じ。**表1**の上・下段のように基本字体・補助字体の使用比率が一〇%以上変化し、かつ同類の変化が同一年度で複数点確認される時に、その年度を大きな用字変化の年と見なしている。前後を見計らって仮設した基準である。

(6) 初稿とされる中尾本は、張り紙以前の本文と張り紙以後の本文とで、成立時期に時間差がある。前者は元禄三年夏―元禄四年秋までの関西滞在中、後者は元禄五年六月以降、江戸で作成されたとの分析がある。伊藤厚貴「新出芭蕉自筆本『奥の細道』の位置付けについて―張り紙改訂前・後の用字法の相違を中心に―」(日本近世文学会平成九年度秋季大会研究発表要旨、『近世文芸』六七、平成一〇年一月)参照。筆者が言う中尾本の執筆は、この張り紙訂正作業後、本文が完成するまでの過程を言う。また天理本はこの中尾本を下敷にして執筆されているので、元禄五―六年次の執筆となる。

(7) 俤・匂・響など、連句の付合いの中では前句の登場人物の心性(人間性)は重要な糸口となっていた。このためその心性を読み取り、付け表わすことは解説され指導されていた。なお長い陳述を一度「龍門」のような簡潔な詞書きに圧縮し、次に瞬発的に発句形式で表出する書き方は、「権七にしめす」(貞享四年冬作)、「素堂亭十日菊」(貞享五年菊月作)、「深川八貧」(元禄元年十二月作)、「重ねを賀す」(元禄三年作)と少数である。

(8) 高橋庄次著「『笈の小文』の謡曲構成について」(『日本文学研究資料叢書　芭蕉Ⅱ』一一六頁、有精堂刊、昭和五二年八月)

(9) 『高橋庄次著『笈の小文』の謡曲構成について』(『日本文学研究資料叢書　芭蕉Ⅱ』一一八頁、有精堂刊、昭和五二年八月)

(10) 元禄三・四年に『笈の小文』が一度編成されたあと、『笈の小文』を三つの海辺の物語(後述する)として再編する元禄六年に、西行法師の修験道修行を踏まえてこの「高野・和歌浦句稿」は追加されたものだと考える。西行の修験道修行については金任仲「西行の大峰修行をめぐって―説話との関連を中心に―」(『文学研究論集』第十六号、'02／2)参照。このため元禄三・四年の編成を取り上げる拙稿では略述するに止めた。

(11) 『笈の小文』乙州本は、道すがらに書いた数十点の「小記」がベースに

なって、「浩瀚」（少なくとも一冊）の体裁に編集された「記」である。当初は素朴な「記」の集合だった本文が主題・構成を備えた紀行文に編成されてゆくさまは、次の記録にも現れている。

芭蕉七回忌追善集『雪葉集』（一吟編、元禄十三年）には義仲寺無名庵の什物の一つとして「大和後の行記　自筆」（『野ざらし紀行』の大和紀行に次ぐ後の「大和紀行」の意）が記録されている。また『泊船集』夏の部、郭公の項の芭蕉発句「須磨の蜑の矢さきに啼や郭公」の後書きには「此詞書ハ須磨紀行に見え侍る」とある。「吉野出山」に先立つ「行脚論」にも独立して賞味された可能性がある。金関丈夫著「芭蕉自筆「笈の小文」稿本の断簡」（『連歌俳諧研究』三十八号、昭和四五年三月）。

(12) この二句唱和は、尾形仂氏の論文「鎮魂の旅情」にすでに指摘されている。またこの句の「足駄」の解説を通してこの二句の応答の見事さについても解説されている。さらに「大和吉野行脚にのみ見出せる特徴的な表現形態、繰り返しと呼応、しかもそれが一貫して万菊とのかかわりにおいて見出される」（「大和後の紀行」井上敏幸『貞享期芭蕉論考』197頁、臨川書店、平成四年四月刊）という指摘もある。

(13) この句は一般には芭蕉の作とされている。また『日本古典文学大系芭蕉句集』九十七頁（大谷篤蔵他編、岩波書店刊）ではこの句を「鉄拐山頂からの眺望の句」とする。制作当初はそうだった可能性もある。が、『笈の小文』の推敲過程でこの句の後に発句「須磨寺や」が挿入され、須磨海岸から須磨寺までの途中吟に修正された。この修正によって発句「ほとゝぎす」は、「須磨の海士」の発句と一対をなす発句に改められた。

(14) この点は、前掲の尾形仂著「鎮魂の旅情」、また「大和後の紀行」井上敏幸『貞享期芭蕉論考』一九八頁（臨川書店、平成四年四月刊）に触れられている。

(15) 著者は富山奏、昭和五十三年三月刊。『小学館日本古典文学全集　松尾芭蕉集②』もほぼ同じ解釈で、「やはり昔からいうとおり、須磨は秋に限るようである。」と付言している点も諸注釈と変りがない。また『古典俳文学大系5　芭蕉集 全』集英社刊（一五四頁）はこれを元禄三・四年の作とする。実際にセッションとして『笈の小文』を読み直す作業は、できれば次稿で行うので省筆する。

(16) 一対をなす句である点は、前掲尾形仂氏の論文「鎮魂の旅情」にも指摘されている。

(17) 綱島三千代著「『笈の小文』成立上の諸問題」（『連歌俳諧研究』第二十五号、昭和三十八年十二月）参照。なお阿部正美氏も「想像を逞しうすれば、この時（※元禄四年四月二十一日〜二十八日）芭蕉は「須磨紀行」の条を書いていたのかもしれない。」という。「『笈の小文』の成立」（『連歌俳諧研究』四十七号、昭和四十九年八月）参照。

なお乙州本『笈の小文』・「惣七宛芭蕉書簡」（貞享五年筆）の翻字掲出は、『古典俳文学大系5　芭蕉集 全』に準拠した。

［はま　もりたろう　三重大学出版会編集長］